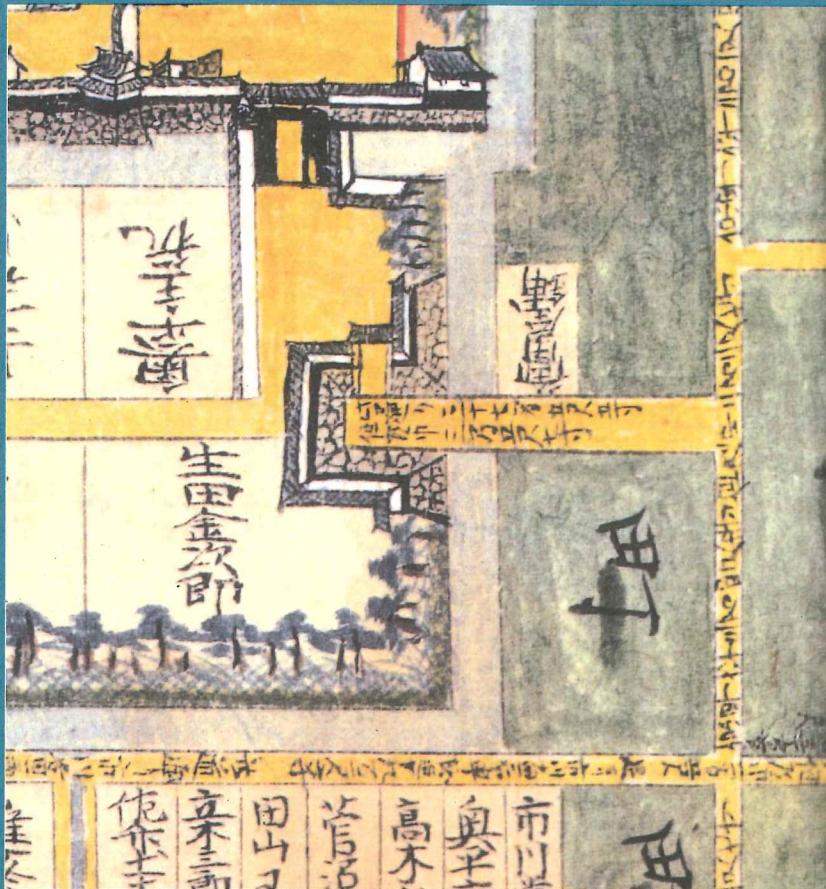


# 中津城下町遺跡 京町 御用屋敷跡

中津市文化財調査報告 第21集



1998

中津市教育委員会

表紙の写真は、吉本 充氏（市内在住）所有の絵図の一部である。

## 例　　言

一、本書は中津市教育委員会が1994年度に実施した中津城下町遺跡京町御用屋敷跡の発掘調査概報である。

一、調査団の構成は下記のとおりである。

調査主体	中津市教育委員会		
調査責任者	高椋 忠隆（中津市教育委員会教育長	～1997年1月31日）	
	前田 佳毅（同）	1997年2月1日～）	
調査事務	土井 勝（同）	市民文化センター課長	～1995年1月31日）
	麻川 尚良（同）	課長	1995年2月1日～）
	佐藤 輝正（同）	文化財係長	1994年4月1日～8月31日）
	田中布由彦（同）	係長	1994年9月1日～）
	富田 修司（同）	主任	）
試掘担当	栗焼 憲児（同）	主任	～1994年3月31日 現豊前市教育委員会）
本調査担当	高崎 章子（同）	主任	1994年9月1日～）
	花崎 徹（同）	技師	1994年9月1日～）

一、発掘調査期間、及び報告書作成にあたり、下記の方々に、有益なご助言、ご指導を頂いた。記して謝意を表する。

大橋康治（佐賀県立九州陶磁文化館）、佐藤浩司（北九州埋蔵文化財センター）、渋谷忠章、清水宗昭、村上久和、吉田 寛、衛藤麻衣（大分県教育庁文化課）、玉永光洋（大分市教育委員会）、小倉正五、林 一也、佐藤良二郎、江藤和幸（宇佐市教育委員会）、吉武牧子（佐伯市教育委員会）、朝田 泰（中津市文化財調査委員）

一、木簡については、半田隆夫氏（中津藩政史料刊行会）に御解説いただいた。

一、遺物写真撮影は、麻川尚良が行った。

一、文章中、図面、図版の遺物No.は、全て「表1出土遺物観察表」に共通する。

一、遺物整理及び報告書作成作業は、中津市歴史民俗資料館の秋吉三和子、中野温子、岩崎弘子、金丸孝子、中島二三恵の多大な協力をうけた。

一、遺物、遺構の製図は、高崎、金丸が行った。

一、本書の執筆、編集は高崎が行った。

一、現場作業は以下の皆さんの協力による。

神崎文子、徳永賀子、黒川みゆき、黒川洋美、田原文子、中 和代、湯口ヒロ子、小倉真理、黒土 勉、山縣信夫、草野郁雄、植山京子、今永キクコ、植山松枝、植山トミ子、植山ヨシカ、辛島雅美

## 目 次

第一章 中津城の歴史とこれまでの調査	1
第二章 京町地区の調査	3
1 調査の経緯と概要	3
2 基本層序	7
3 遺構と遺物	7
(1) 石 壇	7
(2) 建物遺構	9
(3) 溝	10
(4) 板敷き遺構	10
(5) 土 壤	11
第三章 小 結	16
出土遺物観察表	18
図 版	21

# 第一章 中津城の歴史とこれまでの調査

大分県中津市は大分県の最北端に位置し、西側は山国川をはさんで福岡県と接する。山国川は南から北へ流れ、扇状地の中津平野を形成し周防灘へと流れ出す。中津平野は通称沖代平野といい、古代より条里制がしきれ、その方角地割りは現在でもたどることができる。その水田地帯を南に配し、城下町は市の北西端に形成されている。中津城は川と海に面した要衝の地であり、堀の水かさは潮の干満で上下する。二重の堀をめぐらせ、外堀には通称「おかこい山」と呼ばれる土累をめぐらせていた。

そもそもこの地を選定したのは黒田勘兵衛孝高（如水）であった。1587年、秀吉の九州征伐に伴い豊前に入国した彼は、山国川に面した丸山の地に中津江太郎の居城であった丸山城を補修してはいった。「黒田如水縄張り図」（註1）にかれている城は現在と異なる方形である。本丸、二の丸、三の丸のほか、内堀の外には京町、博多町と4つの町という文字が見え、侍屋敷や寺もあり、と記載されている。

1600年には細川忠興の居城となった。忠興は城、城下町の整備につとめ、現在のような扇形につくりあげた。別名扇城と呼ばれるゆえんである。城内には22の櫓と8の門が作られ、城外には上記の他、豊後町や姫路町など、全部で14の町の祖型が作られた。「豊前誌」（註2）によれば、城下町がほぼ完成したのは、寛永から寛文までの30～40年の間で、1631年に入国した小笠原氏の時代に完成したようである。また中津城下で特筆すべきことは忠興の時代につくられた「お水道」と呼ばれる上水道である。忠興は南の大井手の堰から水をひき、城内へ上水道をひきいれた。小笠原の

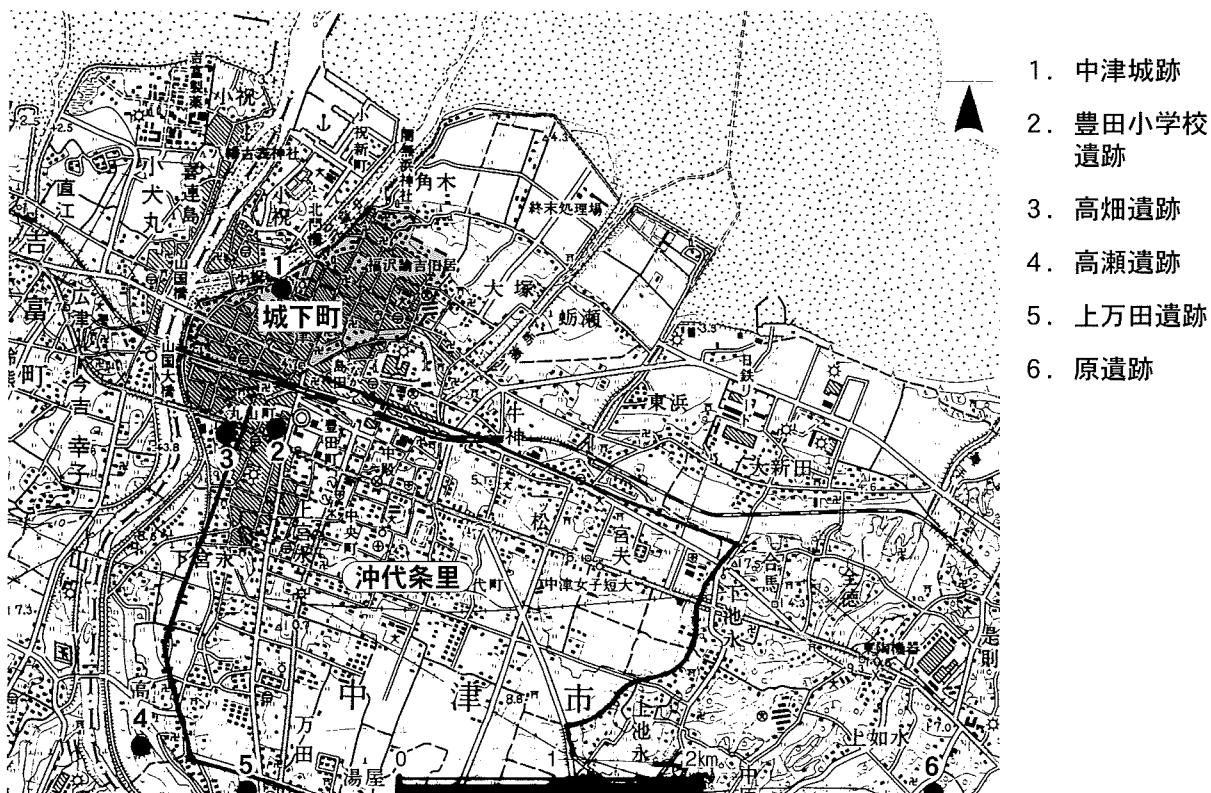


図1 城下町位置図



図2 中津城跡周辺地形図

これまで、中津城本丸部分は奥平神社が建っているため、発掘調査はなされていない。1988年度には、西門近くのおかこい山の調査が行われた。1990年には藩校進修館跡、1992年には樺の木門跡の調査をおこなった。京町の道路では、御水道の溜柵と辻井戸が工事中に見つかっている。また、武家屋敷跡の殿町地区において、1997年、県道拡幅工事の際、発掘調査が行われ、陶磁器がつまつた土壙が数多く検出されている。

(註1) 当館所蔵

(註2) 雄山閣「豊前志」1971

時代には町屋の一部にも水道が拡張されている。現在も下水道工事などで、当時の石垣や溜柵などが発掘されることがある。小笠原の次には1717年、奥平氏が入国し、明治維新まで続く。明治3年、廢城を願いで、翌年、城はとりこわされた。現在堀はその大半が埋め戻され、薬研堀が水をたたえるのみである。一部のおかこい山や門跡等の石垣が残る他は、当時の建築物は姿をとどめない。唯一、昭和39年に奥平氏により建築された模擬天守が往時をしのばせる。

## 第二章 京町地区の調査

### 1 調査の経緯と概要

中津市京町の一角に公民館（南部公民館）建設が計画され、工事に先立ち、発掘調査を行うこととなった。ここは中津城の大手門前にあたり、調査区内には現在は埋められている内堀部分を含む。この地は京町側に属すが、寛文3年（1663）の「中津城総曲輪絵図（庄貞一氏所有）」（註3）には「侍屋敷」の文字が見え、中津市所在の吉本充氏が所有する絵図には「御用屋敷」が4ヶ所描かれていた。城内の二ノ丸に二ヶ所、城外の大手門前と、外堀近くの船場町に一ヶ所ずつで、本調査区は、大手門前の京町のものである。「御用屋敷」の性格は不明であるが、船場町では、牢屋の正面にたてられており、役人の詰所と考えられる。京町のものは、大手門前であることから、門前の詰所的施設であろうか。この絵図には年代がかかっていないが、記載されている武士の氏名より、1838～43年のものと推定される（註4）。当地に御用屋敷の建物がいつまで存続したかは不明であるが、慶応から明治の様子を表した絵図（註5）には、当地はすでに商家となっている。調査区北側は江戸時代の医師田中信平（1748～1824）の邸宅があった場所で、大正期、料亭の「中武楼」がたてられていた（註6）。しかし、これらの建物も昭和20年空襲にそなえた建物疎開で、城下町の町並みは破壊される憂き目となった。その後、警察署、民間アパート等へ建て替えられていった。

1993年、中津市教育委員会は試掘調査を実施した。北西側にトレーニングを開けたところ、内堀と堀の石垣が検出された。堀は西側は調査区外のため東側のみを検出した。石垣は城下町側のものである（図3 斜線部分）。いったん埋め戻し、翌年本調査を行うこととした。1994年、調査区東側には駐車場と民家が残存していたため、西側のみを掘り広げ、その後東側に幅約3m、長さ約33mのトレーニングを設定した。

その結果、内堀の石垣南端で直角に西に折れ、大手門につながる石垣を新たに検出した。堀の東側の表土をはぐと昭和の警察署の建物基礎の石がならんでおり、重機により除去した。調査区内は便宜上、1区～5区に分割した。1区～4区ではサブトレーニングを南北方向にあけ、土層を観察したのち、1区、2区より掘り下げた。江戸時代の建物の礎石、溝、土壙などが検出され、多量の近世陶磁器

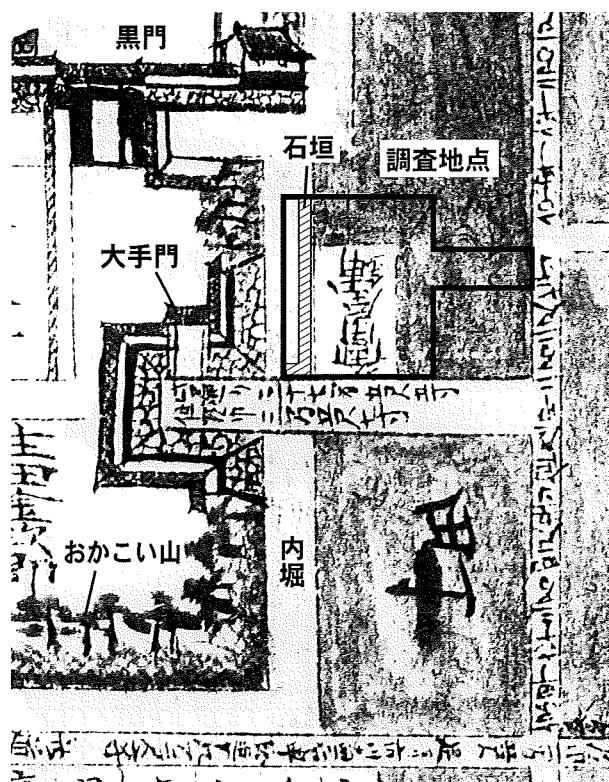
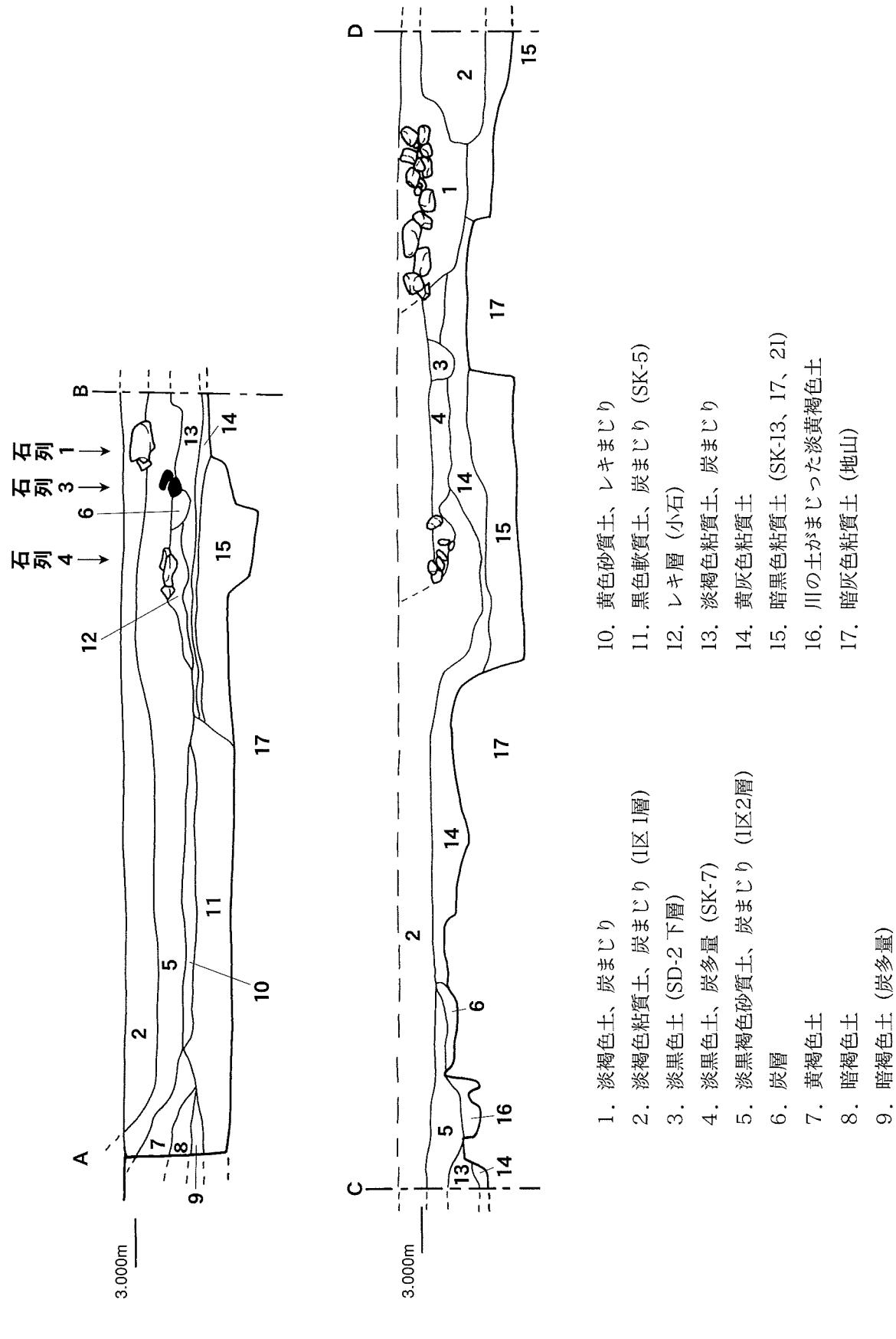
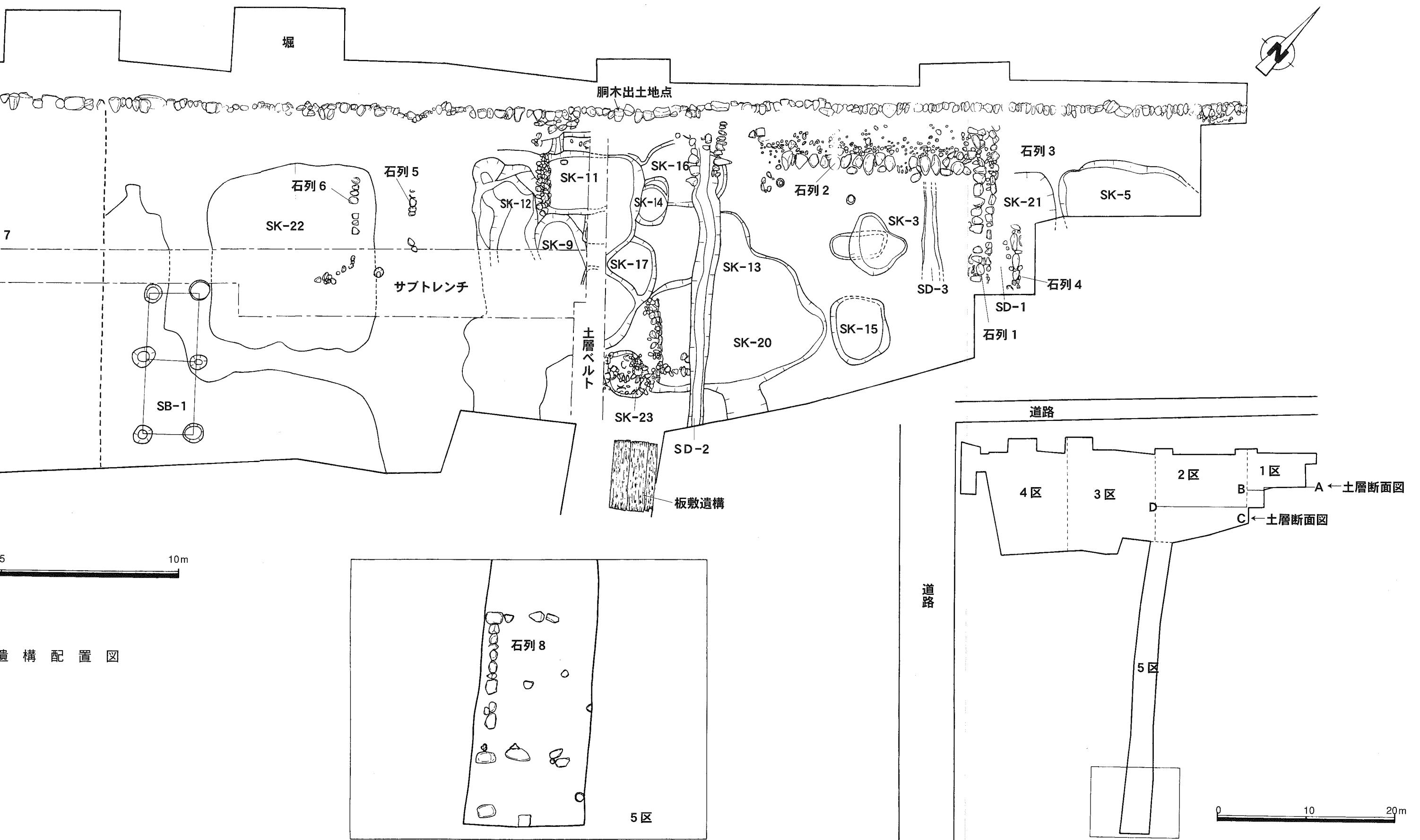


図3 吉本氏所有絵図 御用屋敷位置図

図4 土層図





貴構配図

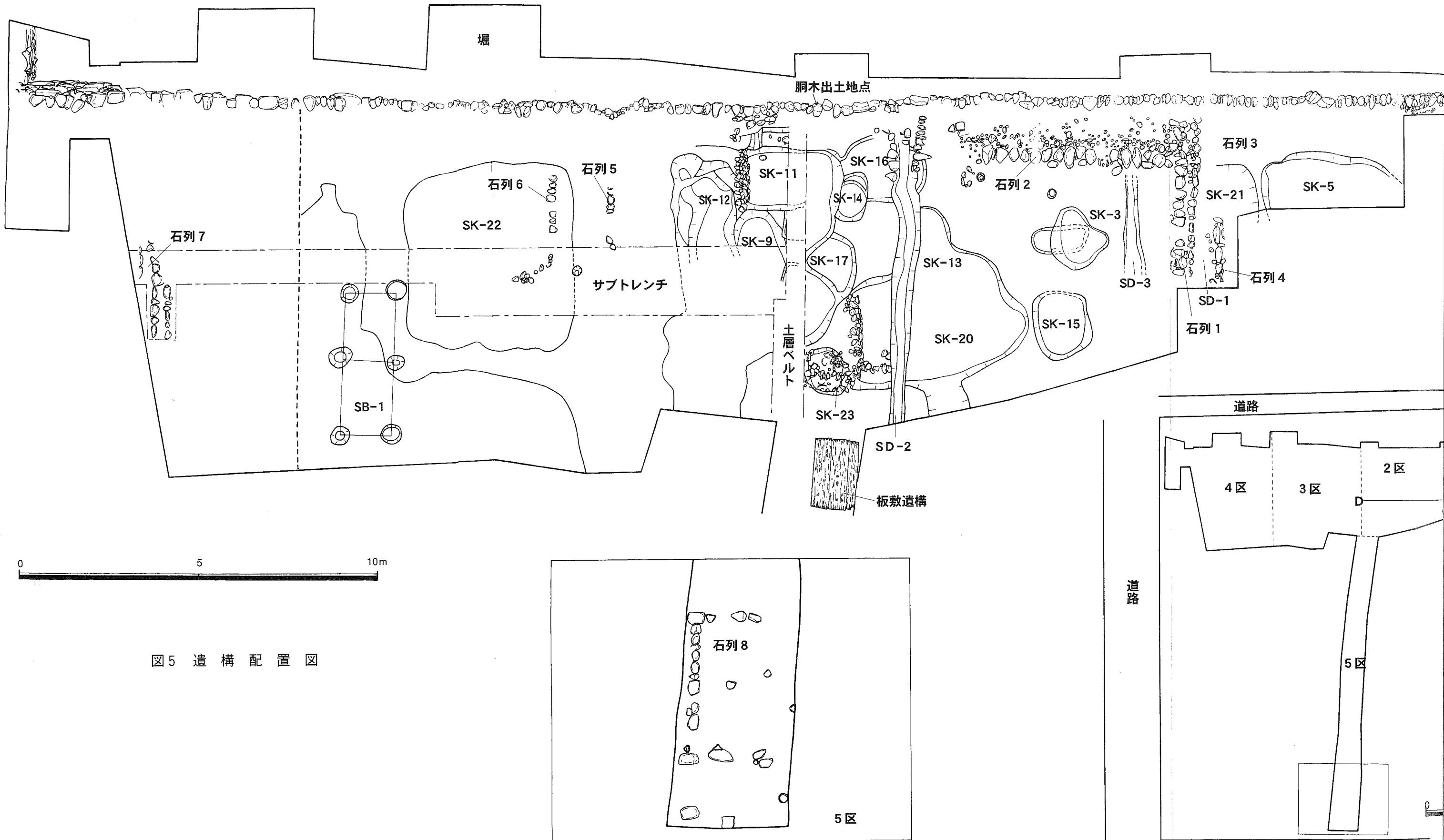


図5 遺構配置図

を採取した。調査結果を見て、公民館建設は計画を変更し、西側に盛り土をして遺構面を傷つけず建設することが決定したため、完掘をまたず調査は終了した。基本的に保存するため、建物の礎石と思われる石列や、堀の石垣はくずさず埋め戻した。ほぼ完掘できたのは1、2区のみであった。3、4区は土層観察のために開けたトレンチ幅のみを調査した。東側の5区は掘り下げず、駐車場として整備し、保存した。堀は埋め戻したが、市の都市計画課により地表に堀と石垣を復元表示し、説明版をつけた。

## 2 基本層序

昭和の警察署の基礎石は標高3.400mの土層の上に構築されていた。3.400mから3.200m～3.100mまでの淡褐色の堅い土層は明治時代以降の整地層である。標高3.100m～2.800mまでは19世紀はじめの整地層（土層図の第2層）と思われ、この層の上に石列2、5、6、7があり、SD-2がほりこまれ、SB-1も確認された。板敷き遺構も第2層のものと思われる。第2層の下には標高2.600mまで18世紀後半の整地層（土層図の第5層）があり、石列1はこの層の上に築かれる。また標高2.900m～2.400mには17世紀後半の遺物を含む整地層（土層図第14層）があり、石列3はこの層より上にある。また第14層の下には当遺跡中、最も古い第15層があり、深いところで底の標高は約2.000mである。暗黒色の粘質土で、17世紀前半の遺物を含む。同様の土壌は1区～4区までのサブトレンチでも確認されている。標高2.600mほどで地山（第17層）に到達しており、それ以下の遺構からは水がわき、木片がしばしば検出された。



大手門に通じる石垣

## 3 遺構と遺物

### (1) 石垣

今回確認された石垣は、内堀の城下町側である。石は大手門に近い側ほど大きく、直径80cmほどであるが、大手門からはなれるにつれ小さくなり、人頭大になる。積み方も雑になり、はらみが観察されるが、下層の方



胴木出土状況

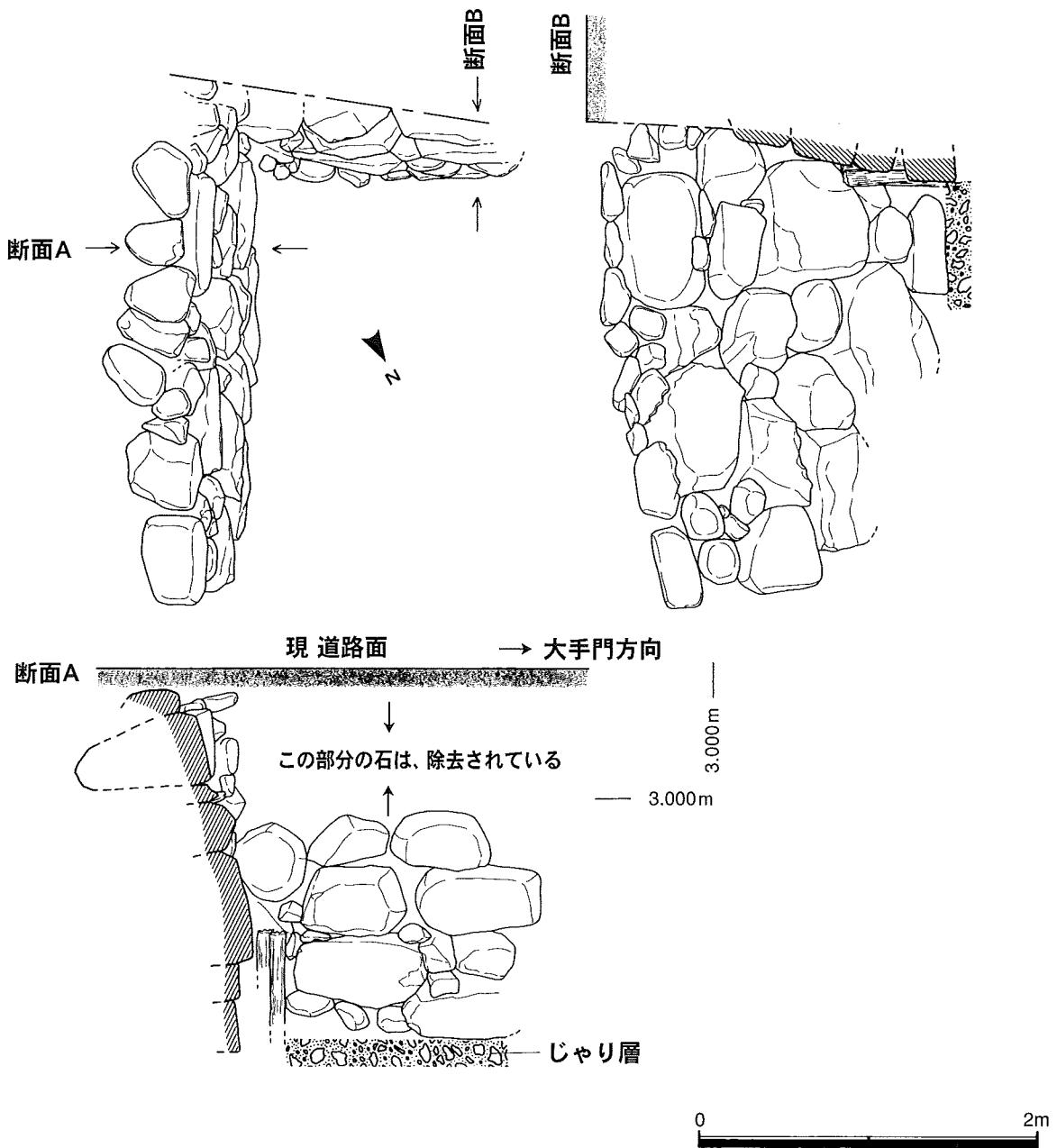


図6 石垣南端実測図 ( $S=1/40$ )

では、安定してつまれていた。乱れは上層でひどくなっており、何度か積み直されていた。堀を一部深掘りしたところ、石垣の下に松材と思われる丸太の胴木が石垣に沿うようにしかれていた。土層観察の結果、石垣は地山からほりこまれており、堀の東側が城下町として機能していた当初から築かれていたようである。堀の最深部は標高約1.500mである。最下層でしゃり層になる。

また今回新たに発見された大手門につながる石垣は標高3.000mほどまでしかなく、それより上の石は後世に除去されているようである。堀の南端のコーナーには2本のクイがたっていた。吉本氏所蔵の絵図には大手門前の道幅を「三間五尺七寸」(約8.5m)と記載している(図3)。現在、調査区から道をはさんで南側の南部小学校の北東隅に石垣が残存している。ここを道の南側として北側に絵図のとおり約8.5m折り返すと、ほぼ今回検出された東西の石垣にあたり、絵図の記述の正

確さがうかがえる。

## (2) 建物遺構

建物遺構としては石列と掘立柱建物を検出した。

石列1と石列3、4は調査区の北端の石列で、東西に並ぶ。石列3、4は石上面の標高が2.800mで、約60cmの幅で向かい合っており、その間には深さ15cmの炭のつまつた溝(SD-1)があった。SK-21の上の17世紀後半の整地層(第14層)の上に築かれている。石列3、4の上には第5層(18世紀後以降)をはさんで石列1がのる。石列1は石列2よりも下の層になる。石列1をおおう第2層にも炭と多くの陶磁器がふくまれており、たびたび、整地し建て直していくたようすがうかがえる。

石列2、5、6、7は石の表面の標高が3.200~3.300mとほぼ等しく、同時期の建物基礎になると思われる。いずれも第2層の整地層上にあり、19世紀

の建物となろう。石列2は北は石列1までで、南北に約5m(約2間半)ならぶ。堀側に石のつらがそろっており、雨落ちであろうか、小石が多数検出された。石列2を一部断ち割ったところ、下にもう一つ石列が並んでいるのが確認できた。第2層の下で、石列1に伴う建物の礎石であろう。石列3、4→石列1→石列2と、同位置で建て替えられていった様子がうかがえる。

石列5、6は直径20~30cmの小石が2列お互いにつらをあわせてならんでいる。両者の間は約1.4mほどで、建物の間の通路のような施設があつたのであろうか。石列7は4区のトレーナーから検出した。大手門前の通りから約3.2mさがっており、建物の端の溝のような施設と思われる。

SB-1は深さ10cmほどの柱穴で、1間×2(+α)間(1.4m×4m)の規模である。石列5、6、7と同じ面から掘り込まれている。

石列8は現在の道路から約3mさがつた建物の礎石で、奥行きは約4m、石の上面の標高は3.600mである。石列の下の整地層からは73~82の遺物が出土している。18世紀前~19世紀中頃



1区全 景



石列 2

までの遺物がふくまれており、石列8は幕末から明治以降の建物の礎石であろう。石列8下整地層出土遺物に、底部に「朝」銘をもつ磁器碗(74)があつた。これは久留米藩御用窯の朝妻焼である。この1点以外に、1997年中津城下町の殿町地区で、県道拡幅工事に伴う発掘調査をおこなつたおり、朝妻焼の碗と蓋各1点ずつが出土している。朝妻焼は久留米藩域以外ではほとんど確認されておらず

(註7)、朝妻焼の流通と中津藩との関係が注目される。



S B - 1

### (3) 溝

SD-1は石列3、4に伴う溝で前述した通りである。SD-2は本来石列2の建物に伴う溝であると思われる。SD-2には石列が伴い、石列をささえるためであろうか、内側に木の杭が打ち込まれていた。SD-2は幅約40~80cm、深さ約30~40cmで、堀にむけ流れる排水溝であろう。何度か掘り直された形跡があり、御水道の石樋が後にはめこまっていた。溝は近代まで利用されていたようで、石樋の下からは近代のガラスの破片が出土している。堀側では石垣がこわされ、土管がうめられ、排水が堀に流れようになっており、石垣が再度つみあげられていた。この土管は大正期以降使用されたものである。

SD-3は地山面にほりこまれた溝で、深さ約10cmほどが確認されている。17世紀前半の土壌と同レベルであり、調査区内では最も古い溝である。

### (4) 板敷き遺構

2区と5区の境にある。横1.2m、縦2.0mの範囲に3枚の板がしかれていた。この板の直上には平瓦、陶磁器、硯など(83~88)が出土した。肥前系、関西系の陶磁器は18世紀後半~19世紀のものである。硯は赤間石でつくった赤間硯とよばれるもので、裏面に「赤間関住 大森定之」と刻まれていた(図7)。87は土師質の焜炉で、同様のものが杵築小学校校庭遺跡、府内城三の丸遺跡で出土しており、「府内城三の丸遺跡」の調査報告書(註8)では豊後地域海岸部で出土する在地産のものと紹介されている。87の胎土には中津地方ではみられない金雲母が含まれており、いずれかからの搬入品と思われる。

遺構の性格は不明である。板を張った地下式倉庫の床面ではないだろうか。



板敷き遺構



88

図7 硯拓影

## (5) 土壙

全部で23個の土壙を確認した。今回ほぼ完掘したのが1区、2区のみであったので、調査区全体ではかなりの数にのぼると思われる。3区、4区については南北にトレーナーをあけたおり、1区2区と同様の土壙の存在を確認している。土壙は大きく3時期にわけられる。地山面から掘り込まれた17世紀前半代のもの（SK-13, 15, 17, 18, 20, 21, 23）18世紀中～後半代のもの（SK-3, 5, 11）、19世紀以降のものである。

図5に調査区内の遺構配置図を掲載しているが、1区、2区では最下層の土壙を優先的に表示しており、上層からほりこまれた遺構は一部削除していることをご了承いただきたい。

## SK-5

1区にあり、北東部分は調査区外にのびる。検出面は4m×1.5mである。深さは約30cmほどで、炭のまじった黒褐色の柔らかい土に多量の遺物が廃棄されていた。出土した陶磁器より、土壙の埋没年代は18世紀後半に比定される。他に土師器の皿や焙烙、金属器、下駄や羽子板などの木器など多彩な遺物が出土した。特に文字の判読できる木簡が6点あった。

94は表に「中津 和泉屋小兵衛様 近江や三郎兵衛」、裏に「拾五丁」、93は表に「中津 いつ



SK-5 木簡出土状況



S K - 5

ミや小兵衛様 近江屋郷兵衛」、裏に「からき廿本入壺丸」と記されていた。他の木簡3点も宛名は「いつミや小兵衛様」で、差出人は「近江屋三郎兵衛」が1点確認できた。もう1点には「松竹」とあった。他に「泉湊伊織」銘の焼き塙壺(18)にも「いつミや」の墨書があり、この土壙が「いつミや」の廃棄土壙であることがわかった。宛名に中津と記載されていることから、木簡の差出人の近江屋は中津藩以外の商家であるといえる。

また土師器の焙烙(8)、こね鉢(7)はいずれも硬質の土師質で、宇佐の高村焼に酷似する。高村焼とは宇佐宮の荘園内の宇佐市下高で12世紀ころから土器を焼き、第二次世界大戦でとだえるまで続いた焼き物で、神宮用の土器のほか、日常雑記を焼いていたことがしられている。これまで中津市のガラヌノ遺跡、宇佐市別府遺跡、などから出土している。また山国川をはさんだ対岸の福岡

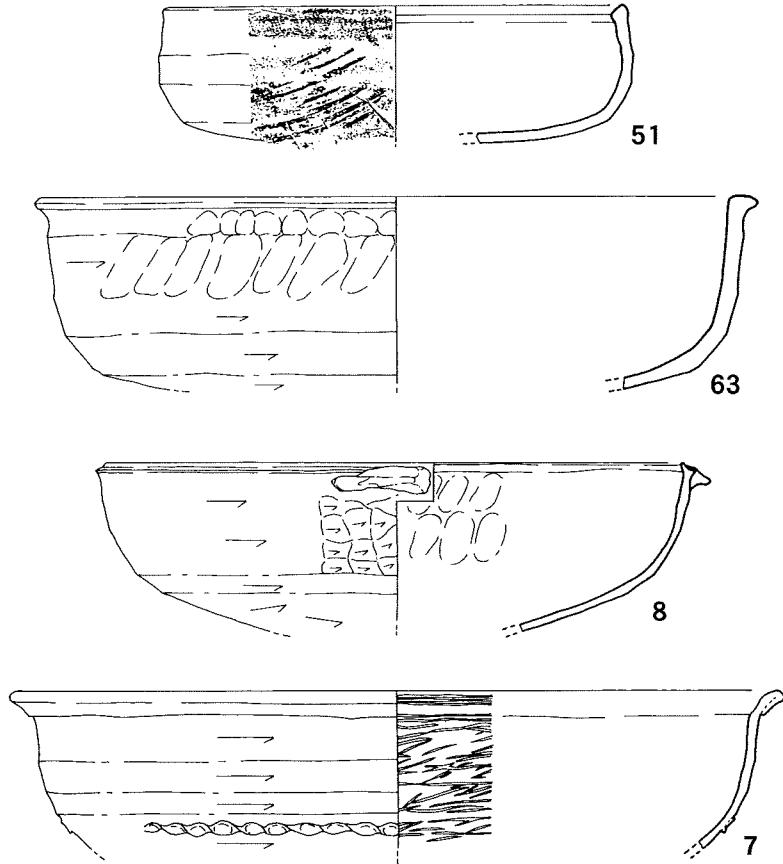


図8 土師器、瓦質土器実測図 (S=1/4)

県築上郡大平村の上唐原稻本屋敷遺跡から数多く出土し、形態分類がなされている（註9）。高村焼のこね鉢は瓦質土器から17世紀中ごろに土師質に移行するという（註10）。SK-13, 15, 17, 20, 21, 23などの17世紀前半の遺構には、上面に17世紀後半の整地層と思われる黄灰色粘質土層（第14層）がのる。この層から17世紀前半代ごろの瓦質土器の鉢（63）が検出されており、高村焼の可能性もある。



SK-11

### SK-11

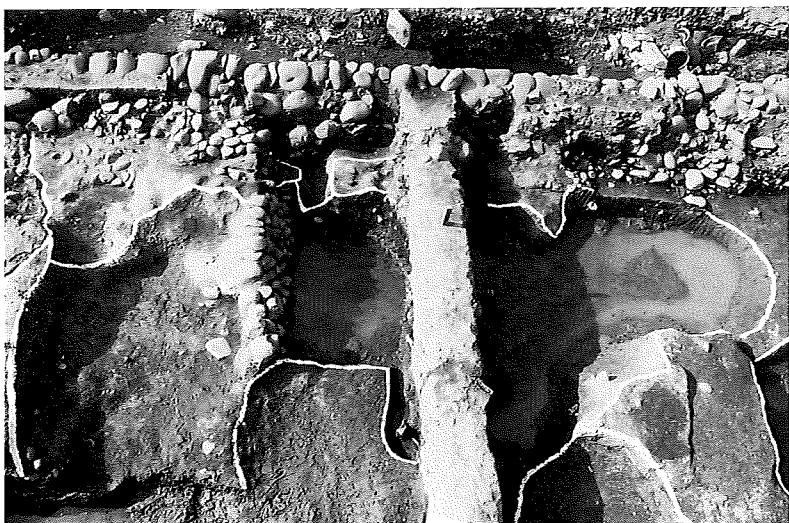
2区と3区の境で、堀に近い場所に位置する。中央に土層ベルトがあり、完掘できていないが、長径3m、短径1.8m、深さ約60～80cmの隅丸方形の土壙である。陶磁器、土師器、金属器とともに木簡2点も出土した。SK-5出土のものと字体も似ており、一つには「いつミや小兵衛様 近江屋郷兵衛」、もう一つには「和泉屋小兵衛」という文

字が確認できた。出土した陶磁器の時代も18世紀後半までにはほぼおさまるものであり、SK-5と同時期に掘られた土壙である。

土壙の南壁には石が積まれていた。石積みの上面の標高は2.850mである。石積みの西側には幅25cm、深さ15～25cmの断面方形の溝がとりついており、堀とつながっていた。溝は堀側が高く、土壙側が低く掘られていた。1997年度、武家屋敷域にあたる市内殿町の調査を行った際、SK-11のものと同様の溝が道路側から円形の土壙に水をひきこんだと思われる遺構が検出されている。殿町の遺構の場合、排水路の水をひきこもうとしているのか、御水道の水を引き込もうとしているのかは不明である。SK-11では現在土壙底面の標高は深いところで2.000mあり、水位が高い。溝は堀から水を引き込み、溜めるためのなんらかの施設ではないかと思われる。

### SK-13、20

2区の中央にある。SK-13とSK-20の間に土層ベルトがあるため、当初別の遺構として番号をつけたが、本来つながったひとつの中の遺構であるかもしれない。西側に飛び出た部分をSK-13、東側のおおきな方形の穴をSK-



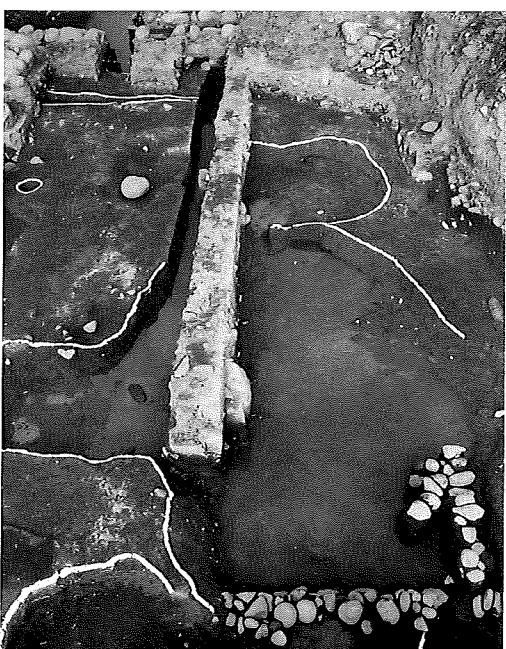
2区、3区



2 区 全 景



SK-13



SK-13、15、20

20とする。SK-20は5m×3.5mで、南壁には石積みがある。池状の遺構であろうか。遺構は地山から掘り込まれており、埋土は暗黒色粘質土で、木片を含む。深さは約30~50cmである。SK-13からは初期伊万里（25~28）や瀬戸美濃の皿（29）、福岡系の陶器（30）、備前の甕（31）など様々な地域のものが出土している。25の鉢はSK-21出土の破片と接合している。また32の掘り鉢は、口縁部はわずかに肥厚し内側に段を有するもので、外面には多数の指押さえのあとがある。17世紀前半の丹波産であろう。SK-20からもSK-13と同様の陶磁器が出土しているが、16世紀までさかのぼる資料として、40の備前甕、36の唐津皮鯨手皿、39の唐津の胎土目段階の皿などで、35は李朝の白磁である。以上、SK-13、20出土遺物は16世紀~17世紀前葉のもので、遺構の埋没年代は17世紀前葉である。

### SK-15

SK-20の北側にある2×1.6m、深さ55cmの土壙である。埋土はSK-13、20と共通する暗黒色粘質土である。遺物の数は少ないが、唐津系溝縁皿の完形品（33）と土師器皿（34）、丸瓦の瓦当（90）が出土した。瓦当文様は左三ツ巴で、外区に珠文が10めぐる。SK-20から平瓦当（89）が出土しており、いずれも17世紀前葉の瓦の資料となる。

### SK-17

2区と3区の中間に位置する。土層ベルトにはばまれ、全形は不明である。18世紀の土壙をほりすすむ内、1

7世紀の別の土壙を掘ってしまったようで、SK-17の上層は18世紀後半の遺物、下層はSK-13,15,20同様、17世紀前葉の陶磁器を出土する。92は下層出土の瓦塔の破片で、屋根の一部にあたる。

### SK-21

1区のSK-5の南に位置し、調査区外及び石列1、3の下にはいっており、全形は不明。埋土は暗黒色粘質土で、陶磁器、瓦質土器が廃棄されていた。陶磁器は初期伊万里（42、43、44、45）、砂目積み段階の唐津（47、48）など、17世紀前葉の遺物が主体である。16世紀のものとしては、41の中国漳州窯系の碗がある。また瓦質の茶釜（52）、土師質の焙烙（51）が出土している。焙烙は大阪周辺に分布する17世紀初頭のものと類似する。同様のものが大分県内では、府内城三ノ丸遺跡と杵築小学校校内遺跡で出土している。両遺跡の焙烙は大阪周辺のものと類似するが、口縁形態の違いなどから、在地での制作が考えられている（註11）。当遺跡のものは口縁内面端部が明瞭な傾斜面をなし、体部が内傾する。外面には体部から底部まで右あがりの並行タタキがほどこされるなど、非常に大阪周辺のものに似ており、搬入品の可能性も考えられる。17世紀前半以前に比定されよう。

### SK-23

SK-20の南に隣接する、直径1.3mほどの円形土壙である。

肥前の染め付け碗、皿などの他に波佐見の青磁大皿（55）も出土した。瀬戸美濃製の壺（53）やSK-13出土のものと同様の丹波の掘り鉢など17世紀前葉の陶磁器が出土する。57の有田の青磁大皿はSK-17, 21, 23の破片が接合したもので、SK-17, 21と同時に埋没した遺構である。

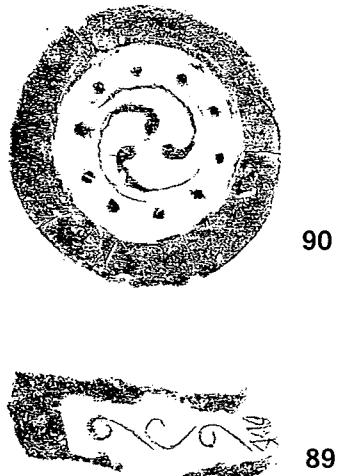


図9 出土瓦拓影 (S=1/4)



石列1、3の下のSK-21

(註3) 中津藩政史料刊行会「中津藩史料叢書 中津藩歴史と風土 第四輯」付図 1983

(註4) 田中布由彦氏の御教示による。

(註5) 黒屋直房「中津藩史」碧雲莊 1940

(註6) 中津市文化財調査員朝田泰氏の御教示による。

(註7) 大石昇「朝妻焼について」『九州近世陶磁学会 資料』

- (註8) 吉田 寛「府内城三ノ丸遺跡」大分県教育委員会 1993
- (註9) 小池史哲「上唐原稻本屋敷遺跡」福岡県教育委員会 1997
- (註10) 大分県教育委員会小柳和宏氏の御教示による。
- (註11) (註8) に同じ。

### 第三章 小 結

黒田氏は1587年豊前の国に入国し中津城を築くが、短い間で中津をあとにし、本格的に城下町建設にとりくんだのは細川氏であったと伝えられている。そして細川氏のあとに入国した小笠原氏の時代に城下町は完成したという。しかし、黒田氏の時代と伝えられる絵図には前述したとおり、いくつかの町が記載されており、当遺跡の京町もそのひとつである。中津城及び城下町の建設がいつ、どの程度行われたのかは、明確なことはわかつていず、考古学的な証明もほとんどなされていない。今回の調査ははじめて城下町を発掘する機会を得た貴重なものであった。

調査の課題は①堀と石垣の成立と構造、②城下町の成立期、③御用屋敷遺構の確認の三点であった。堅牢な石垣があるであろう城側が発掘できなかつたが、大手門に通じる道の下の石垣は城側の石垣を連想させてくれるものであった。堀は大正期まで開いていたため、底まで新しい遺物がはいつていた。また石垣は何度も作り替えられており、現在確認した上段の石は乱雑につまれた後世のものである。しかし、石垣の底で胴木を確認できたことと土層の観察より、当初の石垣が残存していると判断した。石垣は地山を掘り下げて築かれており、城下町建設当初からつまれていたと考えられる。

城下町側の遺構の内、最古のものは溝縁皿や初期伊万里が流通する17世紀前葉である。その中に、黒田氏の時代の胎土目段階の陶器や備前、中国、李朝のものなども出土するが、いずれも量的に少なく、伝世品の感をぬぐえない。この場所の開発は少なくとも細川氏の段階までさかのぼることは確実となつたが、今のところ、これより古い遺物はあるものの遺構は確認できていず、黒田氏の段階に開発されていたかは不明である。

この時期の遺構の埋土はいずれも暗黒色粘質土で、水位が高いため木片を含む。SK-13とSK-21の遺物の接合(25)や、SK-17, 21, 23の遺物の接合(57)が確認された。またSK-21から出土した44の初期伊万里の皿は、同形、同文のものがSK-13, 17からも出土している。以上のことから、これらの遺物は同時に廃棄されたものであるといえる。埋土から炭も確認されており、火災の片づけ穴であろう。3区、4区のトレーナーからも同様の遺構の存在が確認されている。

SD-3はこの時期の遺構とはきりあいがない。標高から同じ時期のものと思ってよく、17世紀前葉の溝である。これらの遺構の上には17世紀後半の遺物を含む整地層(14層)がうすくのり、その上にたつ石列3では、建物の境界はSD-3より北にずれる。石列3が埋没したのは18世紀中～後半で、それ以降、石列1、石列2と、幕末までこの境界は踏襲されている。さて、ここで吉本氏所有の絵図をみると、そこにかかれている御用屋敷の北の境界はこの境界にほぼ一致するようで、いずれかの石列が御用屋敷の建物の礎石である可能性がある。吉本家絵図の制作年代は、かきこま

れている武士の名前より19世紀前～中葉に推定される。しかし、SK-5やSK-11などの18世紀後半の廃棄土壌からは「いつみや」との商家の屋号がかかれた木簡や塩壺が出土しており、ここが「泉屋」の屋敷跡であったと推測される。小兵衛の名が文献で確認できれば、年代はより明確になるであろう。「いつみや」は安政二年（1855）の豪商屋号帖に名をつらねている（註12）。新博多町と古博多町にそれぞれ二軒ずつあるが、京町には見えず、幕末には京町から他所へ移動している。SK-5や11など、18世紀後半の土壌に伴う石列3、SD-1は商家に伴うものといえる。この場所は18世紀後半まで商家が建ち、火災で消失したのち、整地され、中津藩の御用屋敷がたてられたのである。故に石列1、2が御用屋敷の礎石である可能性が高い。絵図では屋敷の構造はわからないが、SD-2が石列2に伴うと考えられることから、いくつかの棟にわかつていたことがうかがえる。また、3区のトレンチから小笠原家家紋の三階菱の鬼瓦（91）が出土した。SK-12出土のものと思われ、商家でなく武家の屋敷の屋根に使用されたものと考えられる。小笠原氏から奥平氏に変わったのは1717年であり、第2章の1で紹介した寛文3年（1663）の「中津城総曲輪絵図（庄貞一氏所有）」に記載されている「侍屋敷」に使用された瓦ではないだろうか。この地の建物は侍屋敷（17世紀）→商家（18世紀）→御用屋敷（19世紀前半）→商家（幕末以降）と変遷していくのである。

今回の発掘では陶磁器を中心とする多くの遺物を採取することができた。調査区全域を完掘することはできなかつたが、これらの遺物は中津城の歴史を雄弁に物語るものである。中世的な瓦質土器から古唐津、初期伊万里に始まり、幕末、明治の日常雑器にいたるまで優に150箱を数える。肥前陶磁が中心ではあるが、福岡県境に位置するため、福岡系の陶器の多さが目を引く。その他の地方からも江戸時代初期から、多くの搬入品がはいりこみ、流通の上でも興味深いものである。一方、不明な点の多い、高村焼きをはじめとする江戸時代の土師質土器、瓦質土器の解明にも役立つ資料が多い。現在資料整理中であるが、引き続き調査を行い、中津城下町をめぐる諸問題の解明につとめたい。

（註12）今永正樹「豊前中津旧藩土銘々帖 中津城下豪商屋号帖」



調査区西側

表1 出土遺物観察表

NO	出土 遺構	器種	法量			装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	
			口径	底径	器高	絵付 細葉	文様	特徴					
1	SK5	磁器	皿	12.0	7.0	3.0	染付透明釉	矢羽. 唐草 見込. 五弁花	輪花	渦福	肥前	18C	
2	SK5	磁器	椀	8.9	3.5	5.1	染付透明釉	雨降り			肥前	17c末~18c群	
3	SK5	磁器	猪口	8.2	3.4	5.0	染付透明釉	窓絵に山水			肥前	17c後~18c群	
4	SK5	磁器	油壺	11.2	6.4	10.7	染付透明釉	草花			肥前	17c後	
5	SK5	磁器	皿		12.0		青磁釉	植物	片彫り 内底. 鉄鋸		肥前	17c後	高台. 蛇ノ目釉ハギ
6	SK5	陶器	皿	34.0	14.0	9.5	鉄釉. 緑釉 白化粧土		刷毛目		唐津	17c後~18c群	二彩手. 高台無釉
9	SK5	陶器	皿	11.0	4.0	3.5	黒 銅緑釉 彫 透明釉				肥前	18c群	見込:蛇ノ目釉ハギ 高台無釉. 内ノ山窯
10	SK5	陶器	碗	10.3	4.2	4.8	鉄絵透明釉	見込. 山水			肥前	17c後~18c群	高台無釉. 京焼風
11	SK5	陶器	碗	11.0	5.0	6.6	染付透明釉	唐草			肥前	18c群	砂目積. 貢入アリ (陶胎染付)
12	SK5	陶器	碗	9.6	4.2	4.8	鉄釉. 薙灰釉				高取	17C	
13	SK5	陶器	水注	12.5	5.0	9.3	鉄釉		ごけ底		福岡	18C後	底部無釉
14	SK5	陶器	火入	10.4	6.5	8.1	色絵. 透明釉	笛. 花			関西	18C後	底部無釉
15	SK5	陶器	すり鉢	32.0							肥前	18c後	槌目11本
16	SK5	陶器	すり鉢	34.0							堺	18c中	槌目11本
17	SK5	陶器	鉢力	14.0	14.0	7.8						18c後	厘鉢力
20	SK5	陶器	鉢		8.0		鉄釉 白化粧土		刷毛目		唐津	18C	
21	SK5	陶器	皿	25.0	7.0	5.8	鉄釉. 薙灰釉				福岡	18C	見込:蛇ノ目釉ハギ
22	SK5	陶器	皿	37.0	12.0		鉄釉 白化粧土	葉	象嵌		唐津	17C後~18C初	砂目積 高台内無釉
23	SK11	陶器	秉燭	14.0	5.0	4.0	鉄釉		糸きり		唐津	18C後	外面 無釉
24	SK11	陶器	皿	25.0	11.0	7.2	薙灰釉				福岡	17C	高台無釉
25	SK13	磁器	鉢	18.0			染付 透明釉	植物	輪花 外面館彫り		肥前	1610~1630	S K 13と S K 21が接合
26	SK13	磁器	皿		7.0		染付透明釉	菊	型打ち		肥前	1610~1630	
27	SK13	磁器	碗				染付透明釉	「寿福」	館彫り		肥前	1610~1630	
28	SK13	磁器	皿	13.6	6.0		染付透明釉	鳥			肥前	17C前~中	砂目積
29	SK13	陶器	皿	16.0	5.5	2.5	鉄絵 透明釉	草	輪花 型打ち		瀬戸	17C前	内面. 布目痕
30	SK13	陶器	壺	9.0			鉄釉				福岡	17C前	底部無釉
31	SK13	陶器	甕	30.0			自然釉				備前	16C末	
32	SK13	陶器	すり鉢	34.0	14.0	31.0					丹波	17C前	槌目6本. 外面指頭痕
33	SK15	陶器	皿	12.8	4.3	2.5	灰釉				唐津	17C前	溝縁皿. 砂目積
35	SK20	磁器	碗		7.0		白磁				難鞠	16C末~17C初	砂目積. 貢入あり
36	SK20	陶器	皿	11.2	4.2	4.6	薙灰釉		輪花		唐津	16C末	皮鯨手. 高台無釉
37	SK20	陶器	皿	11.0	4.2	3.0	薙灰釉				高取	17C前	高台無釉
38	SK20	陶器	甕	26.0			鉄釉				唐津	17C前	
39	SK20	陶器	皿	21.5	7.2	6.0	灰釉				唐津	1590~1610年	胎土目. 高台無釉
40	SK20	陶器	甕	42.0			自然釉				備前	16C前	
41	SK21	磁器	碗	11.0	4.3	5.4	白磁		笠彫り		中国	16C末	漳州系 貢入あり. 高台無釉

NO	出土 遺構	器種	法量			裝飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	
			口径	底径	器高	絵付 紬薺	文様	特徴					
42	SK21	磁器	碗	37.0	7.0		染付透明釉	菊	笠彫り		肥前	1610~1630	砂目積
43	SK21	磁器	皿		7.6		染付透明釉	葡萄			肥前	17C前	砂目積
44	SK21	磁器	皿	13.0	4.6	3.9	染付透明釉	鳥			肥前	17C前	砂目積、貰入あり
45	SK21	磁器	皿	15.0	5.8	4.2	染付透明釉				肥前	17C前	
46	SK21	陶器	碗		4.4		灰釉				唐津	1610~1630	
47	SK21	陶器	皿	13.0	4.2	3.2	灰釉				唐津	17C前	砂目積、溝縁皿 高台無釉
48	SK21	陶器	皿	18.0	6.0	4.2	鉄絵透明釉				唐津	17C前	砂目積、溝縁皿 高台無釉
49	SK21	陶器	碗	11.4	5.0	7.4	鉄釉					17C前	高台無釉
50	SK21	陶器	鉢		9.0		灰釉				肥前	17C	高台無釉
53	SK23	陶器	壺	10.0	7.8	12.0	長石釉 鉄絵				瀬戸 美濃	17C前 貰入あり	耳付、スス付着
54	SK23	陶器	皿	14.5	4.8	4.2	灰釉				肥前	17C前	砂目積
55	SK23	磁器	皿	21.2	4.5	4.6	青磁釉	植物	片彫り		波佐見	17C前	砂目積、三ツ足
56	SK23	磁器	皿		7.5		青磁釉	ひし形	陰刻		有田	17C前	SK21. 23. 17が接合
57	14層	磁器	皿		4.8		染付透明釉	山水			肥前	17C前	砂目積
58	14層	磁器	碗		4.8		染付透明釉			「大正年」	肥前	17C後	砂目積
59	14層	磁器	碗	11.0		6.8	染付透明釉	松葉と 窓絵に水草			肥前	17C後	
60	14層	磁器	碗		4.3		染付透明釉	牡丹唐草		渦福	肥前	18C前	貰入あり
61	14層	磁器	皿	14.0	8.8	3.5	染付透明釉		口紅		肥前	17C後~18C初	
62	14層	磁器	皿		21.0		青磁釉		片彫り 高台内鉄錆		有田	17C後	高台内蛇ノ目釉はぎ
64	1区2層	磁器	皿	24.0	14.5	3.9	染付透明釉	牡丹唐草	輪花		肥前	18C前~中	貰入あり
65	1区2層	磁器	皿	31.0	17.5	6.2	染付釉透明	牡丹菊		「大正北 年」	肥前	18C前~中	ハリさえ
66	1区5層	磁器	皿	12.8	8.0	3.2	染付透明釉	柳	題コニャク 咲の疊花	「大正 年」	肥前	18C前~中	
67	1区5層	陶器	鉢	15.4	6.0	7.7	鉄釉 白化粧土		刷毛目		唐津	18C	見込:蛇ノ目釉はぎ 高台無釉
68	1区5層	陶器	皿	21.0	8.0	5.8	鉄釉 白化粧土		刷毛目		唐津	18C後	見込:蛇ノ目はぎ 高台無釉
69	1区5層	磁器	皿	11.8	4.0	3.2	染付透明釉				波佐見	18C	見込:蛇ノ目釉はぎ 高台無釉
70	1区5層	陶器	香炉	11.0	5.6	6.3	鉄釉		刷毛目		唐津	18C前	高台無釉
71	1区5層	陶器	片口	24.0			鉄釉 白化粧土		刷毛目		唐津	18C	
72	1区5層	陶器	人形	高さ 5.5			緑釉						僧形
73	硝80下	磁器	碗	11.0			染付透明釉	草			肥前	1820~60	貰入あり
74	硝80下	磁器	碗	3.4			染付透明釉	若杉		「朝」	朝妻	18C前	貰入あり
75	硝80下	磁器	碗	9.0	3.3	4.5	染付透明釉	小杉				18C後	高台無釉
76	硝80下	磁器	鉢		7.3		染付青磁釉	花. 唐草		「福」	肥前	18C後	
77	硝80下	磁器	水滴				透明釉		陽刻		肥前	19C前~中	
78	硝80下	磁器	皿			2.0	青磁釉	亀甲	陰刻. 亀形		三田	19C前	三田青磁
79	硝80下	陶器	碗	10.0	4.3	6.3	鉄絵透明釉		端反り		関西系	18C後	貰入あり

NO	出土 遺構	器種	法量			装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考
			口径	底径	器高	絵付 紬葉	文様	特徴				
80	硝80下	陶器 碗	13.0	5.0	5.5	灰釉 藁灰釉				福岡	18C後	見込:蛇ノ目釉はぎ 高台無釉
81	硝80下	陶器 碗	11.0	5.0	7.5	灰釉		刷毛目		肥前	18C前~中	
82	硝80下	陶器 碗	10.0	4.2	5.4	鉄釉		天目		福岡	18C後	よう変あり
83	板敷遺構	磁器 碗	11.0	4.2	5.4	染付透明釉	格子	端反り		肥前	18C後	
84	板敷遺構	磁器 皿	9.0	5.0	2.5	色絵透明釉		輪花			18C後~19C前	
85	板敷遺構	磁器 碗	10.6	4.0	5.8	鉄釉		端反り			19C	
86	板敷遺構	陶器			4.0	透明釉		イッテン樹		関西	19C	
88	板敷遺構	硯	横6.3	高2.0					「赤刷毛 太丸」	下関		赤間硯

類 NO	遺構	器種		口径	底径	器高	色調	焼成	製作地	胎土	調整及び特徴
7	SK 5	土師器	こね鉢	41.2			淡橙褐色	良好	宇佐 (高村焼)	金雲母 白色微粒子	内面 ヨコミガキ 外面 ヨコケズリ 捻った粘土 紐張り付け
8	SK 5	土師器	焙烙	36.0			橙褐色	良好	宇佐 (高村焼)	金雲母多量	内面 指頭痕 外面 ヨコケズリ 耳付き
18	SK 5	土師器	焼塩壺	5.9	5.7	9.5	橙褐色	良好	堺	雲母 白色微粒子	内面 布目 外底 2条の指ナデ
19	SK 5	土師器	焼塩壺 蓋	8.0		2.2	橙褐色	良好	堺	雲母 白色微粒子	内面 布目
34	SK15	土師器	小皿	11.2	8.0	1.8	淡黄白色	良好	在地	角セン石 斜長石	糸切り 口縁部 スス付着
51	SK21	土師器	焙烙	24.8	22.4	7.1	淡橙褐色	良好	関西	雲母 白色微粒子	外面 平行たたき 外面 スス付着
52	SK21	瓦質土器	茶釜	16.6			灰色	良好		雲母. 角セン石 白色微粒子	外面 スス付着 耳つき
63	14場	瓦質土器	こね鉢	38.4	32.0	10.3	淡灰色	良好	宇佐 (高村焼)	角セン石 斜長石	口縁部 肥厚 外面 ケズリ
87	板敷 遺構	土師器	焜炉		22.4		淡黄褐色	良好		雲母 白色微粒子	外面 赤い化粧土

NO	遺構	器種	法量	色調	焼成	胎土	調整及び特徴
89	SK20	軒平瓦 瓦当	瓦当面 縦4.6横15.0	暗灰色	やや不良	白色微粒子	唐草文様. 半欠
90	SK15	軒丸瓦 瓦当	直径 14.8	暗灰色	やや不良	白色微粒子	左. 三ツ巴. 珠文10 瓦当面のみ残存
91	3区トレソ	鬼瓦	縦18.5 横12.0	灰白色	良好	白色微粒子 斜長石. 角セン石	三階菱
92	SK17	瓦塔	縦 7.7 横12.0	暗灰色	良好	白色微粒子 斜長石. 角セン石	屋根の一部



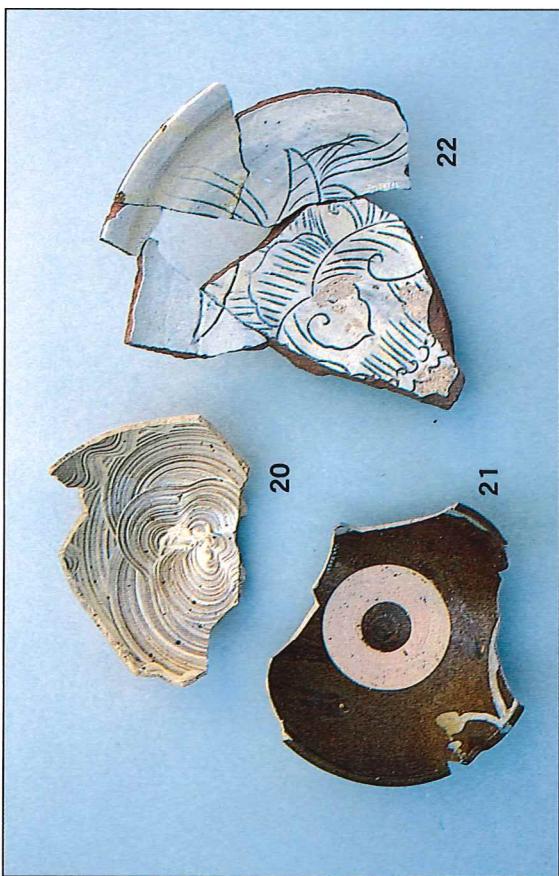
SK-5



SK-11、15



SK-5



SK-5

図版2



SK-20



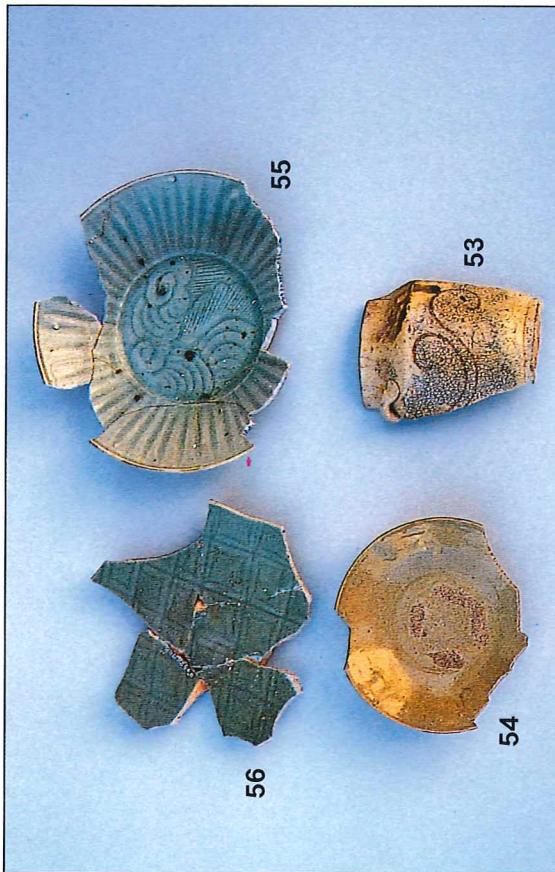
SK-21



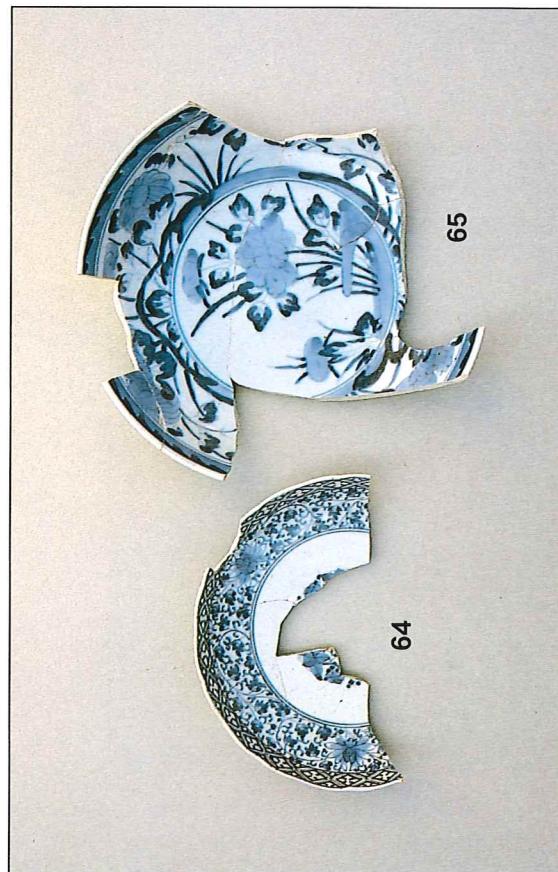
SK-13



SK-21



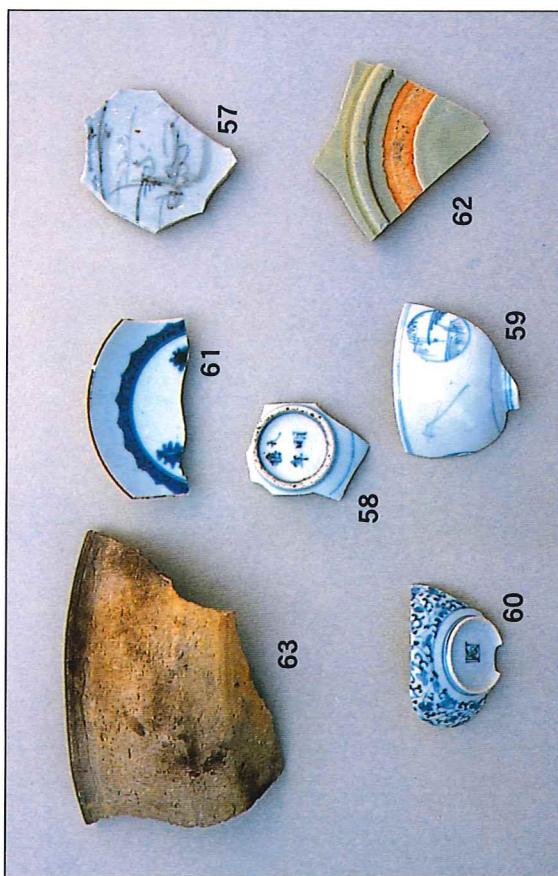
SK-23



1区2层



SK-21



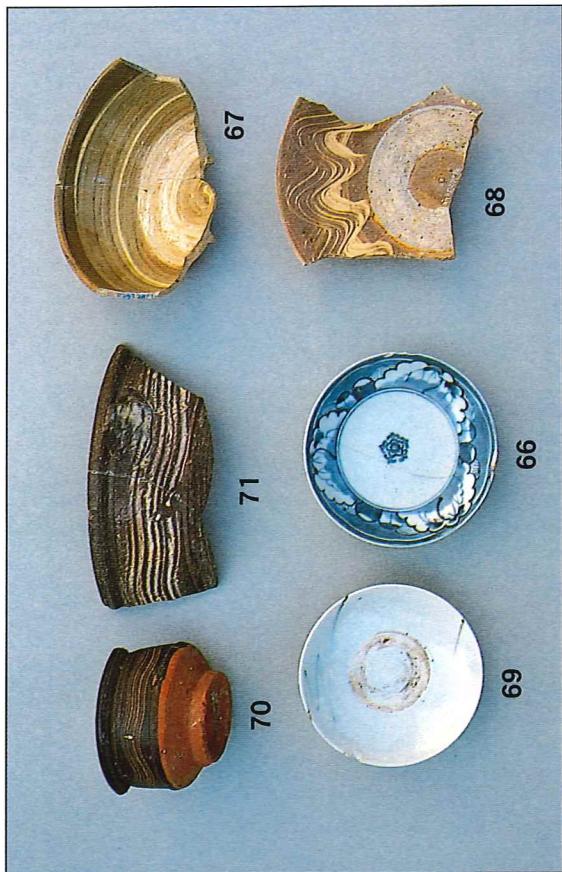
14土层



1区5層



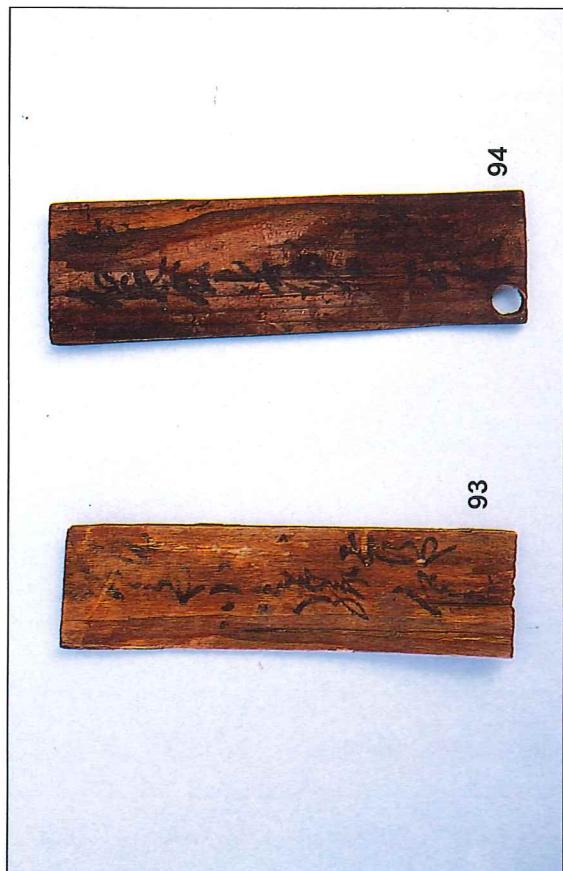
板敷遺構



1区5層



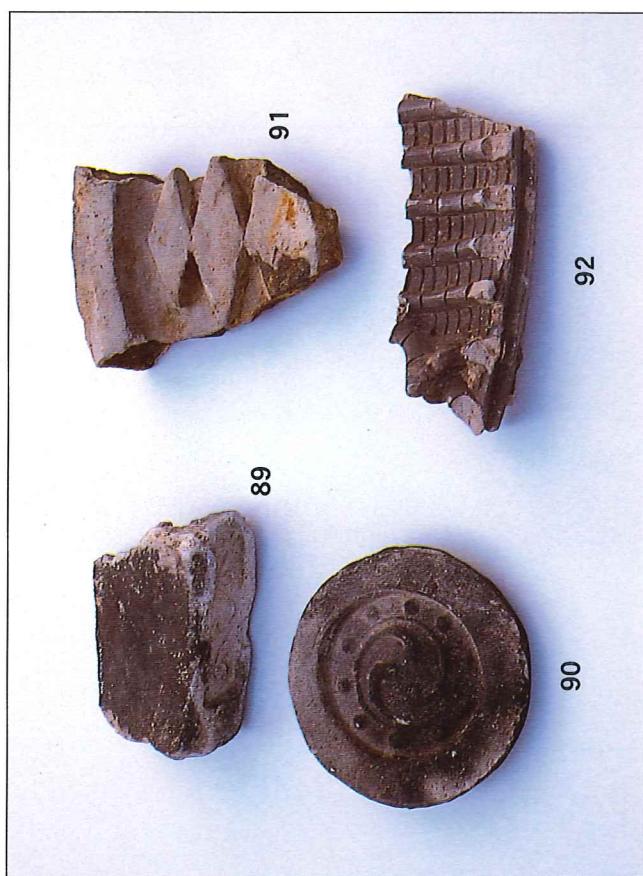
石列8の下



木簡 表



木筒 裏



瓦当、瓦塔

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかつじょうかまちいせき きょうまち ごようやしきあと							
書名	中津城下町遺跡 京町 御用屋敷跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	中津市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	高崎章子							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	大分県中津市豊田町14-3							
発行年月日	1998年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中津城下町遺跡 京町御用屋敷跡	大分県中津市 京町 1468、1470 1471-1	44203	101002	33° 36' 5'	131° 22' 5'	19940714 ~ 19950331	1,574m <sup>2</sup>	公民館 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中津城下町遺跡 京町御用屋敷跡	城下町	江戸時代	堀、石垣 土壙	近世陶磁器		城下町の屋敷跡		

中津城下町遺跡  
京町 御用屋敷跡

中津市文化財調査報告 第21集

1998年3月20日

発行 中津市教育委員会  
印刷 櫛川原田印刷社